

2017
おもろ
チャレンジ

単騎旅行の可能性

文学部 2年

森山 俊

モンゴル

2017年8月20日-

2017年9月11日



渡航概要と内容

1. 渡航内容

(1) 目標の変更について

当初の目標は単騎旅行しながらのホームーの調査であった。しかし、馬による単騎旅行を達成し長距離単騎旅行についての知見も得られたことと、ホームーの習得が予想より困難であると思われたこと、日数のかかる北京経由での帰国で旅費をなるべく抑えたかった理由により、バスによるホブドまでの調査は中止した。

(2) 概要

- I. ウランバートル市内を散策しながら、ツーリストインフォメーションをまわり、馬の購入先を見つける。(2日間)
- II. ウランバートル郊外のテレルジ国立公園内に住んでいる、馬を売ってくれる家族のゲルでお世話になりながら、馬を扱う技術を習得する。(5日間)
- III. テレルジからチンギスハーン像まで、往復 60 kmの単騎旅行をする。(3日間)
- IV. ウランバートルに戻り市内観光。ホームーを鑑賞。家族のゲルを再訪し最後のお別れと乗馬をする。(6日間)
- V. 旅費節約のため、鉄道で北京に向かい空路で帰国。(5日間)

(3) 詳細

- I. モンゴルで馬の購入先のあては全くなかったので、市内のツーリストインフォメーションを回り、馬を売れる家族を見つけた。家族の元までは、ガイドを雇ってジープで向かった。馬は馬具付きで 100 万トゥグルグ (46000 円) であった。

II. その家族は観光客向けの乗馬ツアーに馬を提供していたので、私もツアーに混ぜてもらいながら自分の馬に慣れていった。馬具の扱いや野宿する際の注意など、単騎旅行に必要なものを身につけていった。二週間西方へ単騎旅行するつもりだったが、さんざんお世話になった家族に心配され猛反対されたため、断る事ができなかった。ひとまずチンギスハーン像まで往復で行かせてもらうことにした。それを終えてから長期旅行については再び相談することになった。

III. 昼頃に出発する。河を越える橋までは一部道路沿いを歩くため危険なので、現地の友人が伴走してくれる。20 kgの荷物があっても、伴走があるので馬の歩くスピードは普段（約5.0km/h¹）と変わらない。速歩もする。車で通りかかった韓国人観光客に激励され煙草をもらう。草原に入り伴走がいなくなってから常歩が遅くなる（約4.3km/h）。馬の給水のため幕営は溜め池のそばにする。夜には鞍とクツワをはずし、地面に杭を打ってロープで係留する。ゲル



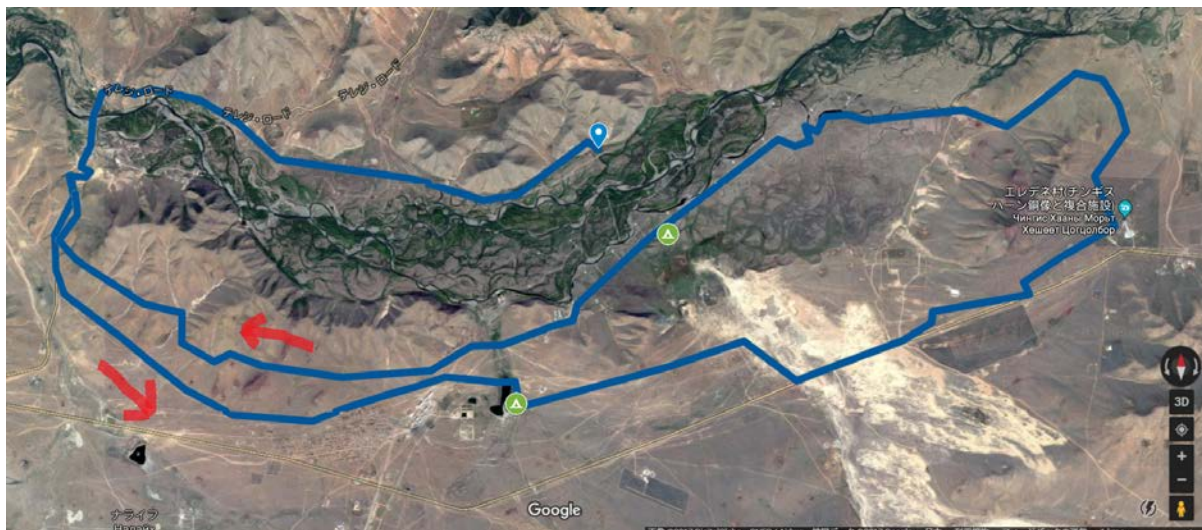
馬を売ってくれた家族の娘とその友人たち

で練習していた時には、クツワをつけようとする抵抗され苦戦したが、二日目の朝はお利口にクツワをはめてくれた。ツンデレな一面に、馬への愛着が5割増しになった。一時間半ほど休憩なしで歩かせたところ、緩い登りの途中で疲れ果てたのか、私に降りろと訴えるように体を地面につけて座ってしまった。かわいそうなことをしてしまい、馬への愛着が更に2割増しになる。17時ころにチンギスハーン像に到着。来た道を引き返すのは癪なので、山の反対側を通るルートを取る。河沿いに幕営。三日目の朝は疲れていて歩きたくなかったのだろう、クツワをはめるのを抵抗された。歩く速度も人間の歩く速度より遅くなり、時折私は馬を降りて引いて歩いた。馬の休憩時間を増やすため、私も草原で昼寝などをした。日没頃（19時30分頃）にゲルに到着する。ゲルの子供たちが馬に三人乗りして出てきて迎えてくれた。ゲルの皆に拍手、称賛される。ハラホルンまで行こうとしていた自分にしてみれば、あまりたいそうなことをしたつもりはなかったが、その場くらいは謙遜せずに、素直に誇らしげにふるまう。

筆者が日本から持って行った主な装備

食料（10日分のレトルトカレー・14日分の α 米・行動食と非常食）、衣類（ヒートテック下着1・パンツ2・靴下2・Tシャツ1・セーター・ジャージ上・ロングコート・ジーンズ・乗馬袴・レインウエア上下）、ガソリンバーナー、鍋1、テント、冬用シュラフ、マット、日用小物、医療品、ポータブルスピーカー、カメラ、三脚、ロープ、ナイフ、ヘッドライト、コンパス、バッテリー

¹ すべての移動速度計測は maps.me アプリケーションの GPS 計測による。



単騎旅行のコース（青ピンが発着地である家族の住むゲル、テント印が幕营地）



20kgの荷物を背負った筆者の愛馬



通りがかった韓国人観光客に激励される筆者

IV. ②「長期渡航を通して感じたこと・学んだこと」で述べるように、単騎長期旅行は難しいという結論に至る。ウランバートルへ帰るゲルの家族の車に便乗させてもらう。ホテルで10日ぶりのシャワーを浴びる。ウランバートル市内の民族音楽劇場にてホーミーを鑑賞する。ホーミーは伝統芸能であり、ウランバートルでは芸人が披露しており、一般の人が出来るようなものではなかった。それでもモンゴルの若者向けの音楽に取り入れられていたり、いまでも広く親しまれていると感じた。



2日目の朝

- V. ウランバートル～成田の航空運賃が6万円ほどなのに対し、寝台列車で北京に向かって成田に飛ぶと半額で済むことがわかり、中国に寄って帰ることに。電車移動に2泊3日かかる。北京観光が予想外に楽しかった。

2. 渡航中に日本との文化の違い等から苦勞したこと

海外渡航は3度目で、単身海外旅行も2度目であったため、慣れている部分が多くあまり苦勞はなかった。私は困難・トラブルを楽しみに海外に行きがちなので、苦勞と感じていないだけかもしれないが。

言語については、モンゴルではモンゴル語やロシア語が話されるが、ゲルの家族の娘らは英語が話せたため、彼女らを通じてコミュニケーションが取れたのであまり困らなかった。モンゴル語の会話帳を持って行ったのでモンゴル語でも最低限のコミュニケーションは取れた。計画になかった中国旅行でも、第二外国語で中国語を学んでいたため、軽い会話が楽しめた。

食事に関しては、モンゴルの料理は馬肉・羊肉やヤギの肉がよく使われるので、独特の灰汁のような臭みがあり、日本人には苦手と思う人もいるだろうと思ったが、私はむしゃむしゃ食べていた。

以上、文化の違い等から苦勞したことがなかったことを示してしまっただけだったが、一つだけ日本にはない習慣に触れる機会があった。ゲルの中で双眼鏡を使うと家畜が死ぬというものである。実際にこれをやってしまい指摘を受けた。

3. 渡航中に起こったトラブルとその対処方法

モンゴルの人は親切でぼったくりの類もなかったため、今までの海外渡航で一番トラブルが少なかった。3度目の渡航ということで、自分が旅行慣れしたのかもしれない。トラブルを強いて挙げるなら以下の二点である。

ひとつは、単騎旅行の三日目の朝、馬の係留を外し足枷をした状態で放して（馬が好きなので芝生を食べられるようにするため）、二度寝をしたら、30分後に広い草原から馬が消えていて焦りを感じた。カメラの望遠レンズで血眼で探した。結局近くの河沿いの土塁の裏側で休んでいた。

ふたつ目は、これもまた三日目の朝、馬を見つけほっとしながらテントを撤収していると、見回りのパトカーがやって来た。知らぬ間に私は国立公園内の外国人立ち入り禁止区域に入って一泊していたらしかった。密猟を防ぐ保安上の理由のため、カメラの動物が写った写真をすべて消されそうになる。幸い英語のできないモンゴル人であったため、言語が通じないことで見逃してくれそうだと感じる。涙目で怒る演技をして英語でまくしたてることで必死さをアピールし、最終的に保安施設が写った写真だけを消してもらえた。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

単騎旅行を終えた結果として分かったことは、単騎で長距離を移動するのは難しいということである。野宿道具や食料を積んだ重装備では馬の体力が続かないのである。今後長距離移動を目指すなら、荷物用の馬と乗馬用の馬の二頭を用意して、引馬（馬に乗りながら他の馬を連れるこ

と)をする必要がある。また人馬に必要な水が確実に確保できないと、危険であり不安であるので河沿いから離れないように進路を取るだろう

また、北京へ向かう電車内で会話が盛り上がったことが楽しくて忘れられない。実は中国に行く際、反日感情を考えて少し身構えていたのだが、総じて中国人は優しく、日本で見聞きする偏った中国の情報に少なからず影響されていた自分に気がつき、恥じた。海外に行くことで、普段気が付けなかった自分の一面を知ることができた。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の渡航は、日本でみっちり下調べや準備をして行ったのではなく、できる限り現地でやりくりして目標を達成した。未知の物事に挑戦するのが不安であっても、とにかく現場に飛び込むことで成し遂げられる場合もあるのだ。それを海外渡航だけでなく学生生活の中でも生かしていきたいと思う。

もちろん馬での長距離旅行もまだあきらめてはいない。次回は綿密な準備をして挑むだろう。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

是非ともプログラムに応募して、豊富な軍資金の下で海外に身を投じて冒険してほしいと思います。

■ 主な奨学金の使途

*渡航費

*移動費

*馬・装備購入費

*滞在費

*海外旅行保険 など